

「若手研究者問題」解決に向けた歴史学関係者の 研究・生活・ジェンダーに関するウェブ・アンケート調査報告書

歴史学関係大学非常勤講師の現状と意識 結果概要

回答期間 2015年9月24日～2016年3月31日

有効回答者数 518名（うち大学非常勤講師と回答した者43名）

1 大学非常勤講師層のプロフィール

- 大学非常勤講師回答者43名のうち、男性25名(58.1%)、女性18名(41.9%)
※回答者全体に占める大学非常勤講師の割合が8.3%にとどまる一方、常勤の大学教員の割合は50.2%であり対照的な結果となっている。
※常勤の大学教員の男女比が8:2に対して、大学非常勤講師の男女比は6:4であり、大学非常勤講師に女性の比重が高い(p.3)
- 研究対象地域の回答者割合は日本55.8%、ヨーロッパ16.3%、中国・朝鮮11.6%、その他アジア地域7.0%、南北アメリカ4.7%(p.3、p.5)
- 研究対象時代の回答者割合(複数回答)は近代55.8%、現代30.2%、中世18.6%、古代18.6%、近世14.0%(p.3、p.5)
- 年齢分布は、男性は35～39歳が36%で最大の割合、40～44歳28%、45～49歳16%、女性は40～44歳が33.3%で最大の割合、35～39歳、45～49歳、55～59歳のいずれも16.7%(p.7)
※女性の方が男性より年齢が高い。また、35～39歳の大学非常勤講師層と大学教員の男女比はいずれも8:2で男性の比重が高いのに対して、40～44歳の場合、大学非常勤講師の男女比が5:5に対して、大学教員のそれは8:2である。40代以降、大学非常勤講師男性が大学教員層へと移行する可能性が高く、大学非常勤講師女性はその地位にとどまる可能性が高いと推測される。(p.7-8)
- 所属した大学院は、国立53.5%、私立39.5%、公立2.3%、海外2.3%、常勤の大学教員と比べて私立の出身者の割合が高い(p.8-9)
- 所属した大学院の所在地は、東京が53.5%、東京以外の関東地方と海外を除いて、ほかの地方はすべて9.3%(p.9)
- 学位取得状況について、大学非常勤講師と常勤の大学教員にほとんど違いはなかった。大学非常勤講師に海外での学位取得者がいないのに対して、常勤の大学教員の方が割合としては少な

いながらも海外での学位取得者がみられる(p.10)

- **取得学位と現在の専門・所属との関係の有無**について、回答者全体および 45 歳未満大学教員の場合、男女でほぼ違いはなく、7 割程度が「関係ある」と回答したのに対して、大学非常勤講師の場合、6 割強にとどまり、かつ女性にその割合が少なかった(p.10-11)
- **留学経験**について、大学非常勤講師の場合、45 歳未満の大学教員と比べて、留学経験者は日本史研究者により少なく、その逆に外国史研究者により多かった。性別では、大学非常勤講師の場合、男性の方が女性に比べて留学経験が多く、常勤の大学教員の場合、女性の方が男性に比べて留学経験が多く、対照的な結果となった(p.11-12)。
- **留学の資金源**は、複数回答形式で、私費(59.1%)、留学先の公的奨学金(31.8%)、日本の公的奨学金(22.7%)の順であり、45 歳未満大学教員との大きな違いは、日本学術振興会による資金を得たものがいなかったことである。

2 進路・職業選択に関する意識

- 大学非常勤講師のうち「**任期なし研究職**」を 9 割、「**教員・学芸員など専門職**」を 7 割強が希望(p.14-15)。
- 大学非常勤講師の**研究職への応募回数**の平均値は 21.8 回、中央値は 15 回、女性の応募回数の中央値はほぼ変わらないものの平均値が男性と比べて低い(p.16)
- **職業選択の条件**として、経済的条件よりも**地理的条件と研究環境を重視**する割合が比較的高く、とくに女性の場合、**地理的条件について 55.5%**が、**研究環境について 72%**が重視している。(p.16)

3 教育活動の状況

- **大学非常勤講師の週当たりのコマ数**:男性の平均値週 8 コマ、中央値週 6 コマ、女性の平均値週 7 コマ、中央値週 5 コマ(p.18)
- **大学非常勤講師の週の労働時間**:男性の平均値週 29 時間、中央値週 28 時間、女性の平均値週 23 時間、中央値週 29 時間、女性の場合、週 10 時間未満と 30~40 時間未満で二分化(p.20)
※大学非常勤講師は平均して、週に授業準備に 10~12 時間、通勤に 6~7 時間、授業時間に週 30 時間弱の計 50 時間弱を費やしている(p.20)
- **1 コマ 2 単位あたりの給与額**:平均値 3 万 2400 円、中央値 3 万円、1 コマ当たり 5 万円以上の回答も 13.9%(p.21)
- **非常勤コマをみつけた方法**(複数回答):指導教員およびその関係者の紹介と所属大学以外の知人の紹介がいずれも 51.2%、所属大学教員および関係者の紹介は 46.5%。女性に所属大学以外の知人の紹介が多い。(p.23)

4 研究活動の状況

- 大学非常勤講師の**査読あり論文**の平均値・中央値約 5 本、**査読なし論文**の平均値 7 本、同中央値 6 本、**学会発表**の平均値 12 回、同中央値は 11 回(p.24-25)。
- 研究を進めていく上での困難**
全体の傾向: 調査資金>文献購入>学会・研究会参加(経済的困難)>研究時間>学会・研究会参加(時間的制約)>文献収集環境>同じ専門分野の人との交流>論文発表の媒体の順に困難の度合いが高まる(p.26、とくに**調査資金と文献購入**)
性別: 学会・研究会参加の困難で、男性は経済的制約>時間的制約、女性は時間的制約>経済的制約と違いがみられ、またこの時間的制約と研究時間の確保の点で**女性が男性より困難の度合いが高い**(p.27)
- 所属学会・研究会の数**: 平均値・中央値ともに 1 団体程度(p.30)
- 1 年当たりの学会・研究会参加の回数**: 平均値 6 回強、中央値 3 回、男女にほぼ差はなく、単身・同居の居住形態でも約 1 回以上の違いはなく、同居の方が少ない(p.30)
- 研究者番号の有無**: 回答者全体の 8 割が研究者番号を付与されていない(p.31)
- 研究時間**: 大学非常勤講師の 4 割が週に 10 時間未満しか研究時間をとれておらず、10~20 時間未満の者を合わせると 7 割を超え、とくに女性の 6 割が週 10 時間未満しか研究時間が確保できていない(p.32)
- 研究費**: 大学非常勤講師の 7 割が研究費の 8 割以上を私費でまかなっており、多くが所属機関からの支給も外部資金の獲得もできていない(p.33-34)
- ハラスメント**: セクハラ**の直接経験**は大学非常勤講師男性 16%、同女性 38.9%、**間接経験**は同男性 44%同女性 55.6%、**パワハラ・アカハラの直接経験**は大学非常勤講師男性 36%、同女性 27.8%、**間接経験**は同男性 72%、女性 77.8%。
※**セクハラとパワハラ・アカハラの直接経験**が回答者全体と比べて高い数値、また女性に高くあらわれる(p.35-37)
自由記述欄では、**歴史学界におけるハラスメント問題についての無意識・無自覚を批判する声や、相談機関の設置やハラスメントを避けるための行動・環境づくりの提案**が寄せられた(p.37-38)

5 生活状況

- 同居の家族関係**: 大学非常勤講師の男性では「**本人のみ**」が 4 割を占め、単身者が比較的多く、「**配偶者／パートナー**」と「**親・兄弟姉妹**」がいずれも 3 割、女性では「**配偶者／パートナー**」が 6 割と多く、「**親・兄弟姉妹**」が 3 割、「**本人のみ**」は 1 割を占めた(p.38-39)
※大学非常勤講師の**既婚者のほとんどが男女ともに「配偶者／パートナー」と同居、45 歳未満の**

大学教員の場合、女性の65%が「単身赴任／両住まい状態」(p.39-40)

・収入状況:

収入源(複数回答):男性の場合、「本人の収入」>「親の援助」>「配偶者／パートナー」

女性の場合、「本人の収入」>「配偶者／パートナー」>「親の援助」

年間個人収入:男性は100～200万円未満が45.8%で最大、100万円未満16.7%を加えれば、
200万円未満が6割強

女性は100～200万円未満が55.6%で最大、100万円未満27.8%を加えれば200
万円未満が83.4%(p.40-44)

・ワーク・ライフ・バランス:「世帯形成」について男性の6割が困難を感じ、「子どもをもつこと」について男性の7割弱が、女性の半数が困難を感じている。「出産による研究・教育活動の制約」について男性の4割強、女性の7割弱が、「育児による研究・教育活動の制約」について男性の5割、女性の7割弱が困難を感じている。「親の介護による研究・教育活動の制約」について、男女とも5割が困難を感じている。(p.45-47)

自由記述欄では生活設計が立たないことへの不安・不満、講義準備ほか教育業務の負担増、雇用保険がないことでの家計負担、認定保育所への託児ができるように自宅での授業準備・採点業務も勤務時間として認定すること、子どもの病気への対応、大学での研究スペースがないことの悩みなど様々な問題点が指摘された。(p.47-48)

6 歴史研究者をとりまく社会・研究環境に関する意識、就職環境・雇用条件に関する意識、学会への要望

・歴史研究者をとりまく社会・研究環境に関する意識:ほかの立場と同様にすべての項目で満足度が低い。社会的評価について大学非常勤講師の7割が満足せず。社会への貢献度と学問の世界の貢献度については、評価が二分しており、3割が肯定している一方、4割が否定している。報酬については8割弱が不十分と回答し、また社会による研究者の活用も否定的評価が8割強に達している(p.50-51)

・就職環境・雇用条件:ほかの立場と同様に、就職の困難、雇用条件の悪化、学会の取り組みのいずれの項目も5を最高とする5段階評価の点数換算で4を超え、これらの項目での強い意識がみられた(p.51-53)。

・学会への要望:自由記述で学会費の常勤・非常勤の差別化、非会員による論文投稿・学会発表の機会提供、学会報告への交通費補助、経済的負担の少ない交流の機会の増加、公募書類の共通フォーマット化、歴史の必要性への世論の喚起などの声があがった。大学非常勤講師層が学会と常に関係をもつことができるような制度づくりが求められるのではないかと。(p.53-54)